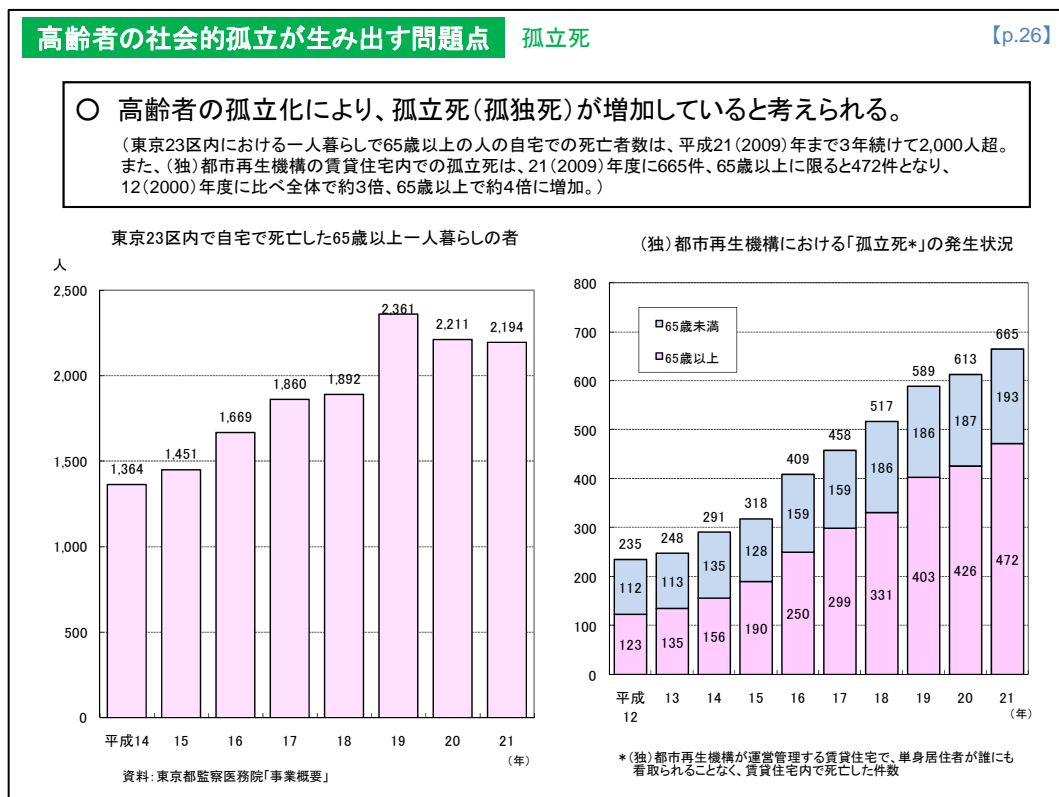


< 孤立死 >

テレビ番組の「無縁社会」でも問題になりましたが、やはり孤立死は傾向としては増え続けているという気がしています。孤立死・孤独死を防止するためにも、地域のつながりがますます大事になっていくと考えております。



< 見守りや居場所づくりの事例 >

高齢者の「見守り」や「居場所づくり」の取組 【p.26-27】

事例① 地域における見守りネットワークの推進(足立区「あんしんネットワーク事業」)
「あんしん協力員」と「あんしん協力機関」が、地域の高齢者を見守り、気がかりな人を発見したときに地域包括支援センターに連絡。連絡を受けた地域包括支援センターが「専門相談協力員」(民生委員)と協力しながら必要な支援を行っている。

事例② 地域の茶の間(新潟市「うちの実家」)
「地域の茶の間」は、有償の助け合い活動の事務所が、自然発生的に、子供からお年寄りまでの居場所となったことから始まった。2003年には、いつでも人に会い、話ができ、人と一緒に食事をとることができる常設型の「地域の茶の間」である「うちの実家」を開設。

事例③ 「時間通貨」の取組(静岡県袋井市「もうひとつの家」)
街の居場所「もうひとつの家」では、8年前から「時間通貨」の取組を行っている。「周」というカードを介して「ありがとう」の気持ちが通貨のように周っていく。「周」があることで、困ったときに気兼ねなく頼むことができ、助ける側も張り合いが出る。「時間通貨」は、全国40か所以上に広がっている。

事例④ 高齢者を対象にした昼食会の開催(秋田県鹿角市「谷内高砂会」)
老人クラブの連合体「谷内高砂会」(会員数約300人)では、月1回、一人暮らしの高齢者などに声をかけて昼食会を開催。欠席した高齢者には、電話等で安否を確認する「元気確認運動」も実施。毎年3月には、一人暮らしの高齢者を訪問して小学生が手紙を渡し、3世代で楽しいひとときを過ごしている。

事例①は、足立区の「あんしんネットワーク事業」です。これは区民の「あんしん協力員」や、商店街、老人クラブ、新聞配達員などの「あんしん協力機関」が様子がおかしい身近な人を発見したときに地域包括支援センターに連絡をして、地域包括支援センターが民生委員（専門相談協力員）と協力しながら必要な支援を行なっている事例です。

事例②は、新潟市の「うちの実家」です。有償の助け合い活動の事務所が、自然発生的に子どもから高齢者までいろいろな方の居場所となりました。それが発展して、常設型の地域の茶の間である「うちの実家」を開設した取組です。

事例③は、静岡県袋井市の「もうひとつの家」です。時間通貨の取組を行なっています。「周（しゅう）」というカードがあり、自分が助けられたときに「ありがとう」と言って渡し、自分が助けたらもらうことができます。ありがとうの気持ちがカードで回っていくので通貨という表現になっています。この「周」があることで、困ったときに気兼ねなく頼むことができます。この取組は全国40カ所以上にあると聞いております。

事例④は、秋田県鹿角市の「谷内高砂会」です。老人クラブが運営しておりまして、高齢者の組織体が高齢者を支えている1つの例です。月1回、一人暮らしの高齢者などに声をかけて昼食会を開催しています。欠席した人には電話で安否確認をしています。また、子どもが訪問して三世代で過ごす取組もしています。

<高齢者の社会的な活動（ボランティア活動）を促進している事例>

高齢者の社会的な活動（ボランティア活動）を促進する取組

[p.27-28]

事例① 介護支援ボランティア制度（横浜市「ヨコハマいきいきポイント」）

高齢者が介護支援のボランティアに参加することを促進するため、活動時間に応じて換金可能なポイントを付与する制度。介護保険料の改定が行われた2009年10月に始め、登録者数は4,000人を超えている。ポイントは1回200ポイントで年間8,000ポイントを上限に貯められ、1ポイント1円換算で換金もしくは介護施設等へ寄付できる。

事例② 援農ボランティア（東京都町田市「たがやす」）

「たがやす」は、高齢化により担い手不足が深刻化している農家に、「援農ボランティア」を派遣。ボランティアに対して、収穫した新鮮な野菜および若干の謝礼金を支払っていることで、ボランティアが活動を継続する1つのインセンティブに。

事例③ 子育て支援ボランティア（宮城県岩沼市「岩沼市生活学校」）

女性中心のボランティア組織「岩沼市生活学校」では、岩沼市の放課後対策事業「のびやか教室」に参加し、学習アドバイスやさまざまな季節行事を行っている。生活学校のメンバーは、夏休みには子育て支援の安全研修にも参加し、子どもたちの安全や救命方法を学び、活動に活かしている。

事例④ コミュニティ・スクール（連雀学園 三鷹市立第四小学校）

地域ぐるみで子どもを育てる「コミュニティ・スクール」に指定された三鷹市立第四小学校では、課外のクラブ活動の指導にあたる「きらめきボランティア」など40人ほどの高齢者がボランティアとして活躍。「夢育支援ネットワーク」が、学校内に活動の拠点を置き、ボランティアをしたい人と学校をつなぐコーディネーター役として重要な役割を果たしている。

事例①は、全国で実施されている介護支援ボランティア制度で、ここでは横浜市の「ヨコハマいきいきポイント」を取り上げています。高齢者が介護支援のボランティアに参加

すると、活動時間に応じて換金可能なポイントが付与される制度です。

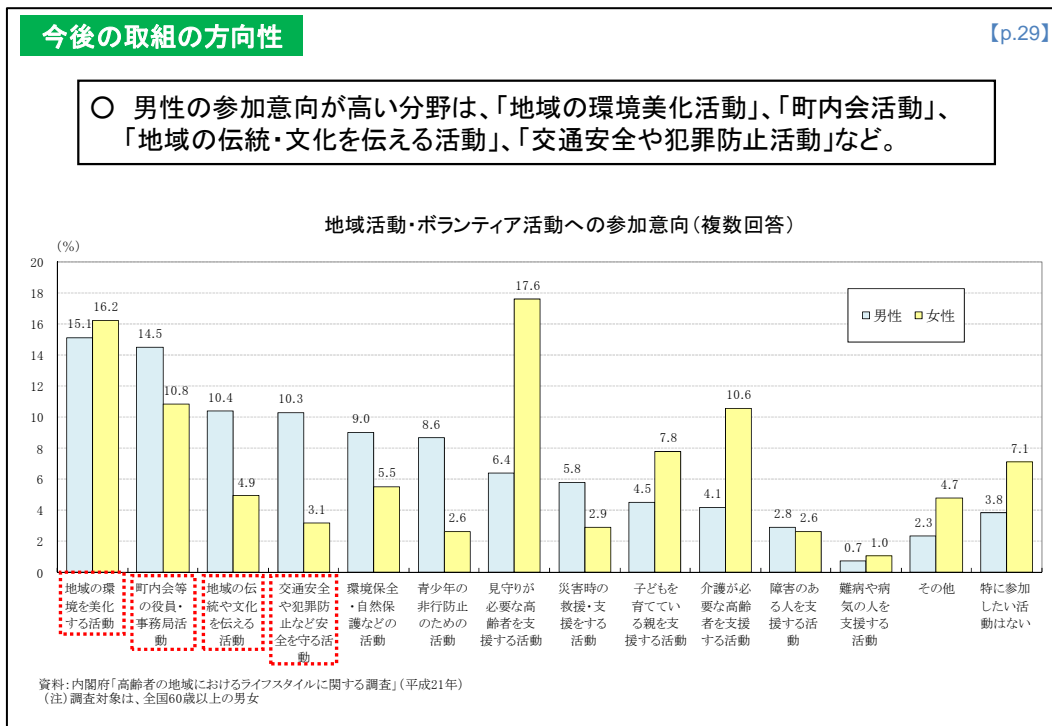
事例②は、町田市の「たがやす」です。農家が担い手不足なのでそこに援農ボランティアを派遣して、そのボランティアが草むしりや種まきをすると若干の謝礼と収穫した野菜をもらえます。特徴的なのは、ボランティア会員 100 人のうち男性が 7 割であることです。ほかのボランティアの事例を聞くと、「女性はたくさん来るけれど男性はなかなか来てくなくて」というところが多かったのですが、ここの援農ボランティアは男性のほうが多いということです。

事例③は、子育て支援ボランティアです。女性を中心とした活動で、宮城県岩沼市の「岩沼市生活学校」を取り上げています。放課後対策事業に参加して、放課後に学習アドバイスや季節行事を行なっています。また、子どもの安全や救命方法を学んで活動に生かしています。

事例④も学校関係で、連雀学園三鷹市立第四小学校のコミュニティスクールです。課外活動の指導にあたるボランティアが、高齢者を中心に活躍しています。

<今後の取組の方向性>

以上のような事例も踏まえて、今後どのような取組が望ましいかをまとめております。



「ア 取組主体の多様化」では、見守りや居場所づくりもそうですが、従来、自治会や町内会や老人クラブは活躍していましたが、それにプラス、市民団体、NPO団体、地元企業などいろいろな主体に参加してほしいということを書いています。

「イ 多世代交流の促進」では、先ほど、いろいろな年代の人が集(つど)っている事例を紹介しましたが、若い人が数十年後の地域のあり方を考えるきっかけ、自分たちの将